

処方番号：94A

処方名：芍薬甘草附子湯（しゃくやくかんぞうぶしとう）

処方構成：

芍薬 3-6、甘草 3-6、加工ブシ 0.3-1.6

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以下で、冷えを伴うものの次の諸症

効能・効果：

こむらがえり、筋肉のけいれん、胃痛、腹痛、腰痛、神経痛

原典：傷寒論

出典：

解説：

芍薬甘草湯に附子が加わった方剤である。『方極』（吉益東洞）には「芍薬甘草湯証にして悪寒する者を治す」と記され、また『医聖方格』には「陰病、悪寒して脚攣急する者は芍薬甘草附子湯之を主る」と述べられている。すなわち芍薬甘草湯の証で、身体が冷えて、新陳代謝が低下しているものが適応となる。

94A.芍薬甘草附子湯

参考文献名	芍薬	甘草	附子	炮附子	白川附子	加工附子	用法・用量
漢方診療医典	3	3	0.5-1				
漢方処方応用の実際 注1	4	3	0.5				
症候による漢方治療の実際 注2	4	3	0.5				
臨床応用漢方処方解説 注3	6	6	0.5-1				*1
傷寒論入門 注4	3	3	0.5				*2
漢方医学	3	3	0.5				
新版漢方医学	3	3	0.5				
傷寒論梗概 注5	4.8	4.8	1.6				*3
漢方古方要方解説 注6	4.8	4.8	1.6				*4
続漢方治療百話 注7	10	8	0.5-1				*5
注8	1.3	1.2				0.5	*6
漢方治療百話 注9	-	-	-				
経験漢方処方分量集	5	5	1				
漢方薬入門 注10	5	5	1				
改訂新版漢方処方集 注11	3	3		0.3	又は1		*7
増補改訂漢方入門講座 注12	3	3		0.3	又は1		*8
漢方入門講座 第1巻 注13	3	3	1				
漢方あれこれ	3	3	1				
新撰類聚方 注14	3両	3両		8片(0.3)			*9
新古方薬囊 注15	3	3	0.2				*10
実用漢方療法	6	6	0.3-1				

- \*1 頓服
- \*2 温服 3回
- \*3 1回に温服(通常1日2回)
- \*4 1回に温服(通常1日2、3回)
- \*5 1日量
- \*6 1日量 3分服
- \*7 3回に分服
- \*8 1日量
- \*9 用量が3回分で芍薬甘草より少ない点に注意
- \*10 2回に分けて温服

注1  
熱が出たとき、誤って発汗剤を用いたため、悪寒するようになったものに用い、雑病では芍薬甘草湯の証で手足の冷えるものによい。急に足のすじがつれて痛いもの、足がしびれて痛むものに効がある。

注2  
内科秘録には、次のような脚気に用いている。”初め湿脚気(浮腫のある脚気)にかかり、薬をのんで水気がとれてのち、乾脚気となり、両脚が萎縮して力を入れることができず、膝はひきつれて伸ばすことができなくなり、諸薬を用いて効のない者には芍薬甘草附子湯を与え、日光に浴びせしむるときは必ず治るものである。”

注3  
芍薬甘草附子湯は、すなわち本方(芍薬甘草湯)に附子0.5~1.0を加えたもので、本方の証で悪寒するもの、陰虚証で冷えを加えたものに用いられる。脈は微弱で沈なるものが多い。

注4  
この(芍薬甘草湯)の腹証にして、悪寒、若しくは骨節疼痛するものは附子を加う。或ひとは曰う、芍薬甘草湯は脚気鳩尾先きへせりつけたるものあり、また両の脇下の腹底に引ばりたる筋あれども見れず、臍の通りに至って塊りたる筋あり、高く皮上にあらわるものは芍薬甘草附子湯の腹証なり。

注5

これは発汗法が其の宜しきを得なかつた為に、氣液は共に虚し、既に少陰の位に變じて惡寒し、或は脚節の攣急を起す證の藥方であつて、主として寒邪を温散し、急を緩め、氣血を調和する等の能を有する。

注6

本方証 発汗して、病解せず、返つて惡寒(陽虚)する証。(太陽病中篇)なり。

- 応用 (一) 発汗の後、身体倦怠し、手足に寒冷を覚え、脈微弱なる証。  
(二) 発熱なく、但だ惡寒を覚え、腹痛し、汗出でて心煩する証。  
(三) 汗出でて、疲労し、腹筋攣急し、或は痛み、脈微にして沈なる証。  
(四) 坐骨神經痛、及び其の類証。  
(五) 脚氣等。

注7

坐骨神經痛

注8

腰背筋伸展(キヤリ腰)

注9

腰痛  
キヤリ腰

注10

坐骨神經痛 下剤を用いると具合の悪い人には芍薬甘草附子湯。

注11

目標 惡寒、或は芍薬甘草湯の証で虚寒を帯びたもの。  
応用 芍薬甘草湯に同じ

注12

運用一 惡寒 「汗を發して病解せず、返つて惡寒するものは虚する故なり、芍薬甘草附子湯之を主る」(傷寒論太陽中) 発汗して陽虚し惡寒するのは陰虚だから、陰虚俱に虚している状態に在る。芍薬を以て陰を補い、附子經を温めて以て陽をめぐらし、甘草は芍薬を助け急迫を治し、且つ附子の副作用を防ぐ。条文通りに発汗後症状がとれたにも拘らず惡寒だけするものに用いる。

運用二 四肢疼痛 芍薬甘草湯に似てはいるが、筋肉がつれるのは従で痛みの方が主である。局所だけで他に格別の所見なきを要する。

運用三 腹痛 胃痛などで芍薬甘草湯に似ているが一層虚し、痛劇甚ならず、腹筋の緊張少なきものに用いる。

注13

主効 虚性の惡寒を治す。  
応用 老人などで故なくぞくぞく寒がるもの、発汗後惡寒だけ残るもの

注14

- 一、発汗後と否とに拘らずにただぞくぞくとし他に症状なきもの
- 二、芍薬甘草湯証のごとく筋肉攣急或は腹痛しそれよりも虚寒の状あるもの

注15

熱があり汗も出て絶えず惡寒し兩足の引き吊りて伸びない者、熱がある病を汗を發し汗出ても癒えず返つて余計さむけが加はりたる者は確實に證となす。

処方番号：94B

処方名：黄芩湯（おうごんとう）

処方構成：

黄芩 4、芍薬 3、甘草 3、大棗 4

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で、腹痛、みぞおちのつかえがあり、ときにさむけ、発熱などがあるものの次の諸症

効能・効果：

下痢、胃腸炎

原典：傷寒論

出典：

解説：

急性の下痢、腹痛に用いられる。

94B. 黄芩湯

参考文献名		黄芩	芍薬	甘草	大枣
傷寒論 太陽病下篇	注1	3両	2両	2両	12枚
診療医典	注2	4	3	3	4
症候別治療		4	3	3	4
応用の実際	注3	3	2	2	3
処方解説	注4	4	3	3	4
実用療法	注5	7	5	5	7
現代入門		4	3	3	4
古方薬囊	注6	3	2	2	4
漢方掌典	注7	9	6	6	9
臨床と応用	注8	8	8	4	4
処方分量集		4	3	3	4

〔注1〕 太陽與少陽合病，自下利者，與黄芩湯，若嘔者，黄芩加半夏生姜湯主之。

〔注2〕 下痢があつて食欲不振，心下痞硬，腹痛，裏急後重があり，他方には発熱悪寒などの表証のあるものに用いる。もし嘔吐，悪心を伴うときには黄芩加半夏生姜湯を用いる。

そこで本方は急性胃腸炎に用いられるが，あまり頻用せられる薬方ではない。

〔注3〕 腹がひきつれて下痢し，みぞおちが痞えるものである(類聚方)。また熱がでて腹が痛み，下痢して裏急後重(しぶりばらで，便通のあとすぐまた便意をもよおし，さっぱりしないもの)があり，膿血便の下ることもある(類聚方広義)。軽い大腸カタル，急性腸カタルに応用。

〔注4〕 本方は主として急性腸炎，大腸炎，消化不良症，また感冒で発熱下痢腹痛があり，粘液便あるいは血便を下して裏急後重を訴える者に用いる。

〔注5〕 実証の人で，カゼを引いたと同時に下痢が始まったり，食べ合わせや軽い中毒で発熱して下痢をするようなときにはこの処方がよく効く。

〔注6〕 発熱下痢して腹痛するもの，あるいは頭痛し，あるいはさむけし，あるいはのどがかわくものあり，あるいは腹はなはだしくしぶりて下痢の回数かぞえ難きもの，あるいは反つて外に熱少なく，しんに熱ありて下痢し，のどがかわくもの，あるいは便に血の混じるもの。

〔注7〕 下痢して腹痛し，胃部停滞膨満あるもの，熱性下痢症，大腸カタル，赤痢。

〔注8〕 腹痛，下痢を主訴とする胃腸カタル。

処方番号：95

処方名：鷓鴣菜湯（三味鷓鴣菜湯）（しゃこさいとう／さんみしゃこさいとう）

処方構成：

海人草 3-5、大黃 1-1.5、甘草 1-1.5

用法・用量：

湯

しぼり：

体力に関わらず、広く応用できる

効能・効果：

蛔虫の駆除

原典：撮要方函

出典：稿本方輿輶

解説：

俗にいう虫下しである。朝晩空腹時に服用する。

95.(三味) 鷓鴣菜湯

参考文献名	海人草	鷓鴣菜	鷓鴣菜 =(即ち海人草)	鷓鴣菜 =海人草	大黃	甘草	用法・用量
処方分量集*	-	3	-	-	1	1	以上に水400mlを加え、煎じて半量とし、カスを去り、2回に分けて朝晩空腹時に服用する。  左三味、水2合5勺を以て、先ず2味を煮て1合を取り、滓を去り、後、大黃を入れ、再び煮て6勺と為し、滓を去りて1回に服す
診療の実際*	3	-	-	-	1.5	1.5	
診療医典* 注1	3	-	-	-	1.5	1.5	
症候別治療*	5	-	-	-	1.5	1.5	
処方解説* 注2	3	-	-	-	1.5	1.5	
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	
漢方百話	-	-	-	-	-	-	
応用の実際*	5	-	-	-	1.5	1.5	
明解処方*	5	-	-	-	1.5	1.5	
漢方入門講座*	-	-	-	6	1	1	
漢方医学*	3	-	-	-	1.5	1.5	
精撰百八方	-	-	-	-	-	-	
古方要方解説 注3	-	-	8	-	1~2	1~2	
成人病の漢方療法	-	-	-	-	-	-	
漢方処方集	-	-	-	-	-	-	

\* 三味鷓鴣菜湯として記載。

〔注1〕 蛔虫症 普通一般に用いる駆虫剤で、蛔虫が上って胃にいるときには効がなく、腸にいるときに用いる。蛔虫症の予防のために平素これを用いる。

蟯虫症 これを連用して使用するとともに、食酢でたびたび浣腸する。

〔注2〕 「蛔虫を下す」 蛔虫駆除に用いる。サントニンに慣れて、サントニンが効かなくなったものにこれを用いるとよく効く。

〔注3〕 古方兼用丸散方にいわく「蟲有リテ吐下シ、諸証ヲ見ハス者ヲ治ス。一方ヲ見ルニ、曰ク、虻蟲、涎沫ヲ吐シ、心痛（胃痛の意）発作、時有ル者ヲ治ス」と。此の方、蛔虫駆除に能く効を奏す。又丸剤と為して之を用ふるも亦可なり。

参考文献：稿本方輿輓 有持桂里口述

蟲 鷓鴣菜湯 鷓鴣菜2匁 大黃三分 甘草一分 右三味以水二合煮取一合空心頓服 後世ノ方書ニ總司ト云名目アリテ方後ニ治嘔吐ノ總司ナトト云コトアリ。總司ト云ハ 譬ハ此方ハ九諸ノ嘔吐ノ症ニハヒロク使用セラルル方ナリト云処ニ云テアルナリ。即 此鷓鴣菜湯ハ虻蟲ヲ治スルノ總司ナリ。ナセナレハ丸虻蟲ニヨリテ嘔吐ヲナシ或狂症 ヲ發シ或頭痛腹痛ノ類一切虻蟲ニ因テ煩ヒヲナス者、此方不治ト云コトナシ、故ニ總 司ト云テヨキ方ナリ。……

処方番号：96

処方名：蛇床子湯（じゃしょうしとう）

処方構成：

蛇床子 10、当帰 10、威靈仙 1、苦参 10

用法・用量：

水 1,000ml を加えて濃縮し 700ml とし外用する

しぼり：

（しぼりなし）

効能・効果：

ただれ、かゆみ、たむし

原典：外科正宗

出典：

解説：

外陰部の癢痒に用いる外用薬である。原方では煎液が熱いうちに、患部へ蒸気をあて、液がさめたときに患部を浸して洗うとなっているが、一般には煎液で温湿布している。



96.蛇床子湯

参考文献名		蛇床子	当帰	威靈仙	苦参	土大黃	縮砂	葱頭
外科正宗 卷之四腎囊風	注1	5錢	5錢 <sup>*1</sup>	5錢	5錢			
医宗全鑑 卷六十九腎囊風	注2	5錢	5錢 <sup>*1</sup>	5錢	5錢	5錢	3錢 <sup>*2</sup>	7個 <sup>*3</sup>
中国大辞典	注3	5錢	5錢 <sup>*1</sup>	5錢	5錢	5錢	3錢 <sup>*2</sup>	7個 <sup>*3</sup>
診療医典	注4	10	10	10	10			
症候別治療	注5	10	10	10	10			

\*1 当帰尾 \*2 縮砂殻 \*3 老葱頭

[注1] 水五碗，煎数滾，傾入盆内，先薰候温浸洗。

[注2] 治腎囊風，湿熱為患，疔瘡作痒，搔之作疼，宜洗。

水五碗，煎数滾，入盆内，先薰，待温浸洗，二次愈。

[注3] 治腎囊風，清水五碗，煎数滾，傾入盆内，先薰，候温浸洗。

[注4] これは外科正宗の腎囊風(インキンタムシ)のところに記載されており，ただれ，痒みのはなはだしいときにこの煎汁で湿布し，または洗うものである。以上を水1000mlに入れ煮て約700mlとし，汁をとって温湿布または洗滌する。

[注5] この方は内服薬ではなく，外用薬で，外科正宗の腎囊風の条に出ている。その主治に 腎囊風(俗にいうインキンタムシのこと)，湿熱，患をなし，疔瘡(ブツブツした小さいもの)を患い，痒をなし，之を搔けば疼をなすを治す。洗ふによろし。”とある。

そこで私は，蛇床子，当帰，威靈仙，苦参の4味をそれぞれ10g宛，ガーゼ袋に入れて水1000mlほどに入れて煮，その温い汁で，男子は陰囊を湿布し，女子の外陰部の痒痒には腰湯をせしめることにしている。堪えがたいような外陰部の痒痒には，まことによくきく。しかし10日以上での連用が必要である。

処方番号：97                    処方名：十全大補湯（じゅうぜんたいほう）

**処方構成：**

人参 2.5-3、黄耆 2.5-3、白朮 3（蒼朮も可）、茯苓 3、当帰 3、芍薬 3、地黄 3、川芎 3、桂枝 3、  
甘草 1.5

**用法・用量：**

湯（原則として）

**しぼり：**

体力虚弱なものの次の諸症

**効能・効果：**

病後・術後の体力低下、疲労倦怠、食欲不振、ねあせ、手足の冷え、貧血

原典：太平惠民和剂局方

出典：

**解説：**

八珍湯（四物湯＝当帰、芍薬、地黄、川芎および四君子湯＝茯苓、朮、人参、甘草の合方を八珍湯と称する）に桂枝と黄耆を加えたもので、本方の適応症状に似ているものには人参養榮湯が適するが、この方には発咳があるので区別できる。

本方は慢性諸病の全身衰弱時の虚証に用いるもので、貧血、食欲不振、皮膚乾燥等を目標とする。活動性、熱の高いものには用いられない。また本方服用後に食欲減退、下痢、発熱などをきたすものには禁忌。この方は気血、陰陽、表裏、内外、ともに虚したるを大いに補うもので、十全の効ありとの意味にて十全大補湯と名付けられた。

97.十全大補湯

参考文献名		人 参	黄 耆	朮	茯 苓	当 帰	芍 薬	地 黄	川 芎	桂 枝	甘 草	熟 地 黄	白 朮	生 姜	大 棗	熟 地
処方分量集		2.5	2.5	3.5	3.5	3.5	3	-	3	3	1	3.5	-	-	-	-
診療の実際	注1	2.5	2.5	3.5	3.5	3.5	3	-	3	3	1	3.5	-	-	-	-
診療医典	注2	2.5	2.5	3.5	3.5	3.5	3	-	3	3	1	3.5	-	-	-	-
症候別治療		3	3	-	3	3	3	3	3	3	1.5	-	3	-	-	-
処方解説	注3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	1	-	-	-	-	-
後世要方解説	注4	3	3	-	3	3	3	-	3	3	1	-	3	1	1	3
漢方百話	注5	2.5	2.5	3.5	3.5	3.5	3	-	3	3	1	3.5	-	-	-	-
応用の実際	注6	3	3	3	3	3	3	3	3	3	1.5	-	-	-	-	-
明解処方		3	3	3	3	3	3	3	3	3	1.5	-	-	-	-	-
漢方の診かた治しかた		3	3	4	4	4	3	4	3	3	2	-	-	-	-	-
漢方医学の基礎と診療		3	2	-	3	3	3	-	3	2	1.5	3	3	2	2	-

〔注1〕 諸種の大病後または慢性病等で疲労，衰弱している場合。諸貧血病，産後および手術後の衰弱，久病後の視力減退等。

〔注2〕 諸種の大病後または慢性病などで疲労，衰弱をきたしている場合，諸貧血病，産後および手術後の衰弱，諸出血，脱肛，久病後の微熱や，視力減退。

〔注3〕 諸貧血症，産後・手術後の衰弱，諸熱性病後の衰弱，諸出血後の視力減退，脱肛など。

〔注4〕 本方は諸病により全身衰弱はなはだしく，貧血，心臓衰弱し，胃腸機能衰え，瘦削し，脉腹ともに軟弱で，皮膚乾燥し，熱状のないものによい。諸病後，産後，癰疽潰後等に広く用いられる。

〔注5〕 気血俱に虚し，発熱悪寒，自汗盗汗，肢体倦怠，あるいは頭痛眩暈，口乾作渴。久病虚損，口乾食少，小腹作痛。

〔注6〕 大病後や慢性病などで疲労，衰弱したもの，産後や手術後の衰弱，諸貧血，諸出血，脱肛，痢疾後，大病後の視力減退，衰弱者の皮膚病など。

〔注7〕 大病後の衰弱，脱肛，るいれき。

処方番号：98

処方名：十味敗毒湯（じゅうみはいどくとう）

**処方構成：**

柴胡 2-3、桜皮（樸椒） 2-3.5、桔梗 2-3、川芎 2-3、茯苓 2-4、独活 1.5-3、防風 1-3、甘草 1-1.5、生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 1-3）、荊芥 1.5-3、連翹 2-3（連翹のない場合も可）

**用法・用量：**

（1）散：1回 1.5 - 2g 1日3回

（2）湯

**しぼり：**

体力中等度なものの皮膚疾患で、発赤があり、ときに化膿するものの次の諸症

**効能・効果：**

化膿性皮膚疾患・急性皮膚疾患の初期、じんましん、急性湿疹、水虫

原典：瘍科方笈

出典：勿誤薬室方函

**解説：**

華岡青洲の十味敗毒剤は『万病回春』の荊防敗毒散の処方から羌活、前胡、薄荷葉、連翹、枳殼、金銀花を除いて桜茹を加えたものである。

浅田宗伯は桜茹を樸椒に代えてこれを十味敗毒湯と称した。

本方は解毒臓器の機能を旺盛にし毒素を解除する効がある。普通、連翹を加えて用いる。癰・癤の初期に用いられ、軽症であればそのまま内消する。内消しないでも毒性を挫くことができる。皮膚化膿症を繰り返すものに対して体質改善の目的に用いられ、湿疹に対してもしばしば著効があり、じんましんにも応用される。

98.十味敗毒湯

参考文献名		柴胡	桜皮	樸	楸	桔梗	川芎	茯苓	独活	防風	甘草	生姜	乾姜	荊芥	用法・用量
診療医典	注1	3	3	-	3	3	3	3	2	2	1	1	-	1	*1
治療の実際	注2	3	3	-	3	3	3	1.5	1.5	1	3	-	1		
処方解説	注3	3	3	-	3	3	4	3	3	1	-	1	1		
応用の実際	注4	3	-	3	3	3	3	1.5	1.5	1	3	-	1		
基礎と診療	注5	3	3	-	3	3	3	2	3	2	3	-	2		
処方分量集		2.5	2.5	-	2.5	2.5	2.5	1.5	2.5	1.5	-	1	1.5		
漢方処方集		3.5	3.5	-	3.5	3.5	3.5	2	3.5	2	-	1	2		
漢方処方	注6	3	-	3	3	3	3	1.5	1.5	1	1.5	-	1	*2	

\*1 桜皮の代りあるいは樸楸を用う

\*2 炎症強いときは連翹3を加える

注1 本方は常に連翹を加味して用いる。小柴胡湯の応ずる体質で解毒の効を求める場合に適す。この意味で癰、癤、湿疹の他、肺門結核症、腎臓炎、糖尿病、梅毒、いわゆる水虫、神経衰弱症などにしばしば応用することがある。

注2 炎症性瘡腫の初期で葛根湯加桔梗石膏を用いて効のないものに用いる。

注3 乳腺炎、上顎洞炎、にきび、中耳炎、ものもらい、外耳炎などに応用する。

注4 蜂窠織炎、リンパ腺の腫張。

注5 毒下し。

注6 皮膚症で患部が乾燥してないもの。

処方番号：99                    処方名：潤腸湯（じゅんちょうとう）

**処方構成：**

当帰 3、熟地黄・乾地黄 各 3（又は地黄 6）、麻子仁 2、桃仁 2、杏仁 2、枳実 0.5-2、黄芩 2、厚朴 2、  
大黄 1-3、甘草 1-1.5

**用法・用量：**

（1）散：1回 2-3g 1日 3回

（2）湯：上記量を1日量

**しぼり：**

体力中等度あるいは中等度以下で、ときに皮膚乾燥などがあるものの次の症状

**効能・効果：**

便秘

原典：万病回春

出典：

**解説：**

比較的体力のない人の常習性便秘、とくに高齢者の便秘に繁用される。原方では、煉蜜（蜂蜜を煮詰めたもの）を用いて丸薬としているが、散剤で用いてよい。処方中の地黄は熟地黄、乾地黄のいずれかを 6 配合してよい。

99.潤腸湯

参考文献名	当 帰	熟 地 黄	乾 地 黄	麻 子 仁	桃 仁	杏 仁	枳 実	黄 芩	厚 朴	大 黄	甘 草
万病回春 卷上大便閉 注1	等分	等分	等分 <sup>*1</sup>	等分	等分	等分	等分 <sup>*2</sup>	等分	等分	等分	等分
診療医典 注2	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	1.5
症候別治療 注3	4	4 <sup>*4</sup>		2	2	2	2	2	2	2	1.5
応用の実際 注4	4	4 <sup>*4</sup>		2	2	2	2	2	2	2	1.5
処方解説 注5	3	3	3	2	2	2	1	2	2	1~3	1.5
実用療法 注6											
明解処方 注7	3	3	3	2	2	2	0.5	2	2	1	1
処方分量集	3	3	3	2 <sup>*3</sup>	2	2	2	2	2	2	1.5

\*1 生地 \*2 枳殻 \*3 並麻仁 \*4 地黄

〔注1〕 潤腸丸：治大便閉結不通，右剉一劑，水煎空心温服，大便通即止藥，不能多服，如修合潤腸丸，將藥加減，各為末，煉蜜為丸，如梧桐子大，每服五十九丸，空心白湯吞下，切忌辛熱之物，實熱燥閉，依本方，發熱，加柴胡，腹痛，加木香，血虛枯燥，加當歸熟地桃仁紅花，風燥閉，加郁李仁皂夾羌活，氣虛而閉，加人參郁李仁，氣突而閉，加檳榔木香，痰火而閉，加瓜蒌竹瀝，因汗多，或少便去多，津液枯竭而閉，加人參麥門冬，老人氣血，枯燥而閉，加人參鎖陽麥門冬郁李仁，倍加當歸熟地生地，少用桃仁，產婦出血，多枯燥而閉，加人參紅花，倍加當歸熟地，去黃芩桃仁，此方加檳榔，即通幽湯。

〔注2〕 本方は虚証の傾向ある弛緩性の常習便秘，またときには弛緩と緊張と同時にある場合でもよい。体液枯燥により腸内に熱をかもし，腸管が乾いて潤いを失い，常習性便秘をきたしたもので，コロコロした兔の糞の如きものとなり，皮膚枯燥，腹壁弛緩，糞塊を触知するなどを目標とする。本方は古方の麻子仁丸の去加法である。以上の目標にしたがって本方は常習性便秘，とくに老人の便秘症，高血圧症，動脈硬化症，慢性腎炎などに合併した便秘で，他の下剤のよく奏効しないときに用いてよい。

〔注3〕 麻子仁丸によく似た薬方で，これよりさらに体液が欠乏して，そのために大便の秘結しているものに用いる。

〔注4〕 頑固な便秘に用いる。麻子仁丸の証に似てさらに体液の欠乏が甚だしい状態が目標である。したがって老人や衰弱者に適応症が多い。

〔注5〕 本方の適応症は，老人などにことに多く，皮膚枯燥し，腹部は堅く，あるいは腹壁は弛緩して，大腸内に硬い糞塊が累々と触れることがある。便はコロコロした兔糞のようなものが多い。動脈硬化症，慢性腎炎などに合併して起こった老人の常習性便秘で，津液枯燥のあるものによい。これらの便秘に対しては，相当長期間連用しても，忌むべき副作用や習慣性は起こらないようである。

〔注6〕 体力のあまりない老人で，皮膚がカサつき，大便は，出ればコロコロとしたのが少量出るだけというような場合にはよく効くことがある。

〔注7〕 この方は傷寒論の麻子仁丸とほとんど相違なく，ただこれは当歸，地黄など血燥を治す薬を加味したただけのもので，麻子仁丸同様，老人性の便秘で小便多く体液は欠乏しているが，他にこれといって苦情のない者に用いる。ただ血燥の薬が加味されている点より考えて，本方は麻子仁丸証で皮膚枯燥のはなはだしい場合に用いればよいと思われる。

処方番号：100

処方名：蒸眼一方（じょうがんいっぼう）

処方構成：

白礬（明礬）2、甘草 2、黄連 2、黄柏 2、紅花 2

用法・用量：

各生薬を混合後、水 300ml を加え煎じて 200ml とする。洗眼又は温湿布する

しばり：

（しばりなし）

効能・効果：

ものもらい、ただれ目、はやり目

原典：校正方輿覧

出典：

解説：

黄連・黄柏の清熱（消炎）と甘草の鎮痛作用を利用した目の外用薬である。



### 100.蒸眼一方

参考文献名		白 礬	甘 草	黄 連	黄 柏	紅 花
診療の実際	注1	2	2	2	2	2
診療医典	注2	2	2	2	2	2

注1 注2 眼瞼縁炎(ただれ目)に温湿布する。

処方番号：101

処方名：小建中湯（しょうけんちゅうとう）

**処方構成：**

桂枝 3-4、生姜 1-1.5（ヒネシヨウガを使用する場合 3-4）、大棗 3-4、芍薬 6、甘草 2-3、  
膠飴 20（マルツエキス、滋養糖可、水飴の場合 40）

**用法・用量：**

湯

**しばり：**

体力虚弱で疲労しやすく腹痛があり、血色がすぐれず、ときに動悸、手足のほてり、冷え、ねあせ、鼻血、頻尿および多尿などを伴うものの次の諸症

**効能・効果：**

小児虚弱体質、疲労倦怠、慢性胃腸炎、腹痛、神経質、小児夜尿症、夜なき

原典：傷寒論、金匱要略

出典：

**解説：**

体質虚弱者の滋養強壯剤とでもいえる方剤で、とくに小児の虚弱体質改善に繁用される。膠飴以外を煎じ、残渣を除いた煎出液に膠飴を入れ、再び5分ほど加温して膠飴を溶かし込んだ後に服用する。

本方は桂枝加芍薬湯に膠飴を加えたもので、膠飴の滋養強壯、急迫症状の緩解といわれるはたらきから、桂枝加芍薬湯のしぶり腹、腹痛などより幅広い適用となっているものと考えられる。

注意：本方は嘔吐や急性の炎症のあるものには使用できない。

## 101.小建中湯

参考文献名		桂枝	生姜	大棗	芍薬	甘草	膠飴
傷寒論 太陽病中篇	注1	3両	3両	12枚	6両	2両	1升
金匱要略	注2	3両	3両	12枚	6両	2両	1升
診療医典	注3	4	4	4	6	2	20
症候別治療	注4	4	4	4	6	2	20
応用の実際	注5	4	4	4	6	2	20
処方解説	注6	4	4	4	6	2	20
実用療法	注7	4	4	4	6	2	20
漢方あれこれ	注8	4	4	4	6	2	20
処方分量集		4	4 <sup>*1</sup>	4	6	2	20
処方集		3	1 <sup>*2</sup>	3	6	3	40 <sup>*3</sup>
新撰類聚方		3両	3両	12枚 (3.0)	6両	3両 (2)	1升 (40.0)
現代入門	注9	4	4	4	6	2	20

\*1 乾生姜のときは1 \*2 乾姜 \*3 水飴

〔注1〕 傷寒，陽脈濡陰脈弦，法当腹中急痛，先與小建中湯，不差者，小柴胡湯主之。傷寒，二三日，心中悸而煩者，小建中湯主之。

〔注2〕 虚勞，裏急，悸，腹中痛，夢失精，四肢痠疼，手足煩熱，咽乾口燥者主之。男子黄，小便不利，当與虚勞小建中湯。婦人腹中痛，小建中湯主之。

〔注3〕 平素から身体の虚弱の者で疲労しやすいもの、または平素は頑丈であった者が無理を重ねて、ひどく疲労しているようなときに応用の機会がある。症状としては疲労倦怠を主訴とするもの、腹痛を主訴とするものがあり、心悸亢進、盗汗、衄血、夢精、手足の煩熱、四肢の倦怠疼痛感、口乾、小便自利などの症状が見られる。応用範囲が広く、ことに乳幼児に用いる場合が多く、虚弱児童の体質改善、夜尿症、夜啼症、胃炎、小児の感冒、麻疹、肺炎などの経過中に、急に腹痛を訴える場合などに用いられる。また慢性腹膜炎の軽症、肺結核の軽症で、経過の緩慢な場合、カリエス、関節炎、神経症、乳児のヘルニア、喘息、紫斑病、フリクテン性結膜炎、眼底出血などにも効がある。

〔注4〕 虚勞を目標にして、虚弱児童の結膜乾燥症、動脈硬化症による眼底出血に用いる。またはげしく歯の痛むものに、小建中湯の証がある。これも急迫をゆるめる効があるが、この方は腹証で用いる。この方は桂枝加芍薬湯に膠飴を入れたもので、大黃は入っていないが、これでよく通じのつくことがある。

小建中湯は体質の弱い人、ことに小児に多く用いられるが、平素丈夫な人でも、無理を重ねたりして疲れているときには、小建中湯の証をあらわすことがある。からだ痩せているとか、血色がわるいかいような、外観だけで証をきめてはならない。小建中湯証では、腹直筋が二本の棒のように緊張して腹表に現われていることが多いが、また腹が全体に軟弱無力で、腸の蠕動を腹壁を通じて観察できる場合もある。虚弱児童の夜尿症に用いる。また尿をもらすことはないが、尿が近くて量もまた多いものにも用いる。虚弱児童で常習性に衄血を出すものに用いる。また紫斑病の少年の衄血に用いて効を得たことがある。

〔注5〕 (1)腹が急に激しく痛み、脈が洪、弦のもの。この痛みはひきつれるような痛みが多い。(2)体力のない虚弱な人が、熱病にかかった初期、2～3日ごろ、心悸亢進して身体が苦しいもの。(3)身体が虚弱で疲れやすく、腹壁の筋肉が薄く腹直筋のみが拘攣し、あるいは腹が痛み、あるいは動悸がし、鼻出血があり、あるいは夢精、手足がだるい、手足が煩熱し、咽喉や口が乾燥し、尿の量や回数が増えるなどの症状を呈するもの。

【注6】 虚弱児童の体質改善薬として重要なもので、主として夜尿症、夜啼症、腎硬化症、前立腺肥大、慢性腹膜炎の軽症で腹水なく硬結のあるもの。小児の熱性病経過中に腹痛を訴え、また平常ゆえなく臍傍にときどき腹痛を訴えるものなどに用いられる。

【注7】 胃潰瘍に瞑眩卓効があった。体力が中等度以下で、疲れやすい、鼻血が出やすい、おなかがよく痛くなるなどの症状があり、腹力が全体に弱いか、または表面だけがピンと張っているというような場合の便秘につかっ、よく効くことがある。やせて顔色がわるく、いくら食べても少しも太らない子どもがいる。よく腹痛を訴えたり、鼻血を出したりするが、半年から一年ぐらい続けて飲ませると、顔色がよくなり、太ってくる。

ヘルニヤの七割は、この小建中湯でなおる。体力のやや落ちた人の肝炎で、慢性の場合に使うことが多く、疲労感のはなはだしく、黄疸があり、小便はかえってよく出る。腹は表面の筋肉だけが、ペニヤ板でもはったみたいにピンと張っているが、よくさぐってみると、底力がない腹力を呈している。このような肝炎に、この処方はときに意外なほどによく効く。

【注8】 虚弱児童：幼いころ、ぶくぶくふとっていたのが、学校に行くころになって急にやせ出し、背ばかりひよろひよろとのびた子どもがいる。こういう子どもには小建中湯が合う。この処方、こども用に作られたといってもいいぐらいの当たりのやわらかいもので、しらずしらずのうちに胃腸を強化しようという処方である。

注意：この処方にも禁忌があって、吐き気や急性炎症があるときは使ってはならない。

【注9】 体質の弱い人に使われる薬であり、腹症は腹直筋が二本の棒のようにへソの両側でつばっている状態であるが、必ずしもそうでない場合もある。夜尿症の場合もよい。

少食で、平常感冒に罹りやすい、寝汗をかいたり、冷えると腹痛を訴え、便秘しやすく、排尿回数が多い虚弱な子どもに用いる。